

塗装の使命再認識

木材塗装研究会

会長 大隅 豊康



謹んで新春のお慶びを申し上げます。

昨年からの引き続き世界経済に大きな影響を及ぼすユーロ通貨と中東の不安定な情勢が注視され、国内では円高と悪材料が山積しています。長

期の景気低迷が続いている昨今、多くの企業では、経営安定化のための戦略と検証に日夜奮闘しています。

木材塗装と関わりの深い住宅、家具、楽器関連業界も厳しい環境にさらされています。明日につながる方策を模索し、効率的にアウトプットを出さなければなりません。そのための視点の一環として、物作りの原点に振り返り、本来の塗装が果たす使命を再認識する必

要性があります。

素材である木材に塗装する目的は、天然が生み出した幾何学模様の木地を、より美しく変貌させる技によって、付加価値が付けられています。美しい仕上がりであると評価される要件は、製品に求められる特質で異なっています。その共通項目を整理することが出来ます。

例えば、木材の木理、道管は鮮鋭に生かされているか。木材の色付けは、素材色とマッチングしたナチュラルな色で、均一であるか。木材表面は平滑な面を保ち、打ちは、引っかき傷、そして、異物が付着していないかな等が挙げられます。これ

らの項目を、すべて塗装の工程だけで満足させることは不可能です。つまり、塗装の前工程である木工部門の単板化粧材やはぎ接着、木地仕上げがキーポイントになります。"塗りは木地にあり"の格言通り、木地仕上りの出来次第で、塗装仕上げの良し悪しが決まります。塗装の基礎工事に相当する木地作りは塗装仕上りの生命線であり、より一層強化しなければなりません。

通常の塗装工程は、木地の着色後は、塗装、乾燥、研磨が何度にわたり繰り返されています。その中で注目すべき工程は、木地への着色で、美しい仕上げを完遂するた

めに重要な位置にあります。つまり、木地仕上げと着色工程は、密接な関係にあり、双方のコミュニケーションを密にしたチームプレーが求められます。具体的には、相互の作業内容とその出来栄の因果関係が分かる良き理解者でしょうか。

木工部門は、塗装を知り、塗装部門は木工を知ることです。そのためには、木工業者は、塗装を経験させ、塗装業者は、木工を経験させる多能作業者の育成こそ、技能強化と相互連携で強靱な組織になります。これらによって、美しく洗練された塗装仕上げが実現し、顧客満足度がより一層上がり業績向上に貢献出来るものと確信致します。